新橋小学校

学校だより

令和５年８月３１日
令和５年度　第５号

「地図」を眺める夏

校長　西尾 琢郎

本当に、本当に暑い夏です。そんな中、今月５日には実に４年ぶりとなる新橋連合町内会の夏祭りが本校校庭で開催されたことは、この上なく嬉しい出来事でした。その準備や後片付けも、猛暑の中、本当に多くの方々のご協力があってできたことと深く感謝いたしております。

近ごろでは、過去の同じ時期の出来事をSNSが知らせてくれる自分自身の書き込みから思い出すことも多くなりました。それを見ていると「体温を超えるような猛暑日」は、これまでにもなかったわけではないことが分かります。しかし今年の夏は、ただひたすら「猛暑日」が延々と続くというところに異常さを感じます。「夏日」という言葉がほとんど姿を消し、「真夏日」という言葉がその意味を失い、ついには「猛暑」がまったく特別な表現ではなくなってしまったのが今年なのかもしれません。「異常気象」が「通常運転」のように受け止められつつある今、「平年」という言葉は、もはや過去だけを意味するような、そんな感覚を覚えるのです。

私はこの夏、いろいろな地図を眺めて過ごしました。それは世界地図であり、天気図であり、紛争地図です。天気について言えば、日本だけでなく世界中で、いつでも、どこでも「異常が日常となる」事態を迎えています。地球温暖化に伴う影響の危険性については、もう長いこと指摘されてきましたが、有効な手立てを講じることができないまま、私たちはこの夏を迎えてしまいました。

一方、世界各地で絶えることのない紛争も、昨年来のロシアによるウクライナ侵攻によって、新しい次元に入ったように感じます。地図を見ながら各種の報道を読み解いていくと、つくづくこの争いが、たんなる地域紛争ではなく、世界のさまざまなできごとと、空間的にも時間的にも一つながりになった大きな物語の一部であるように見えてきます。

これからの社会を、そしてこの星を少しでもよいものにしていくという難事業を、好むと好まざるとに関わらず、私たちは子どもたちに担わせてしまうことになります。私たちにできることは、投げ出すことなくこの課題に向き合い、解決していくための姿勢とその手段について、子どもたち一緒に考え続けていくことだと思っています。

「平年」が、もはや過去だけを意味するのと同じように、学校で学ぶ知識の多くも、実は過去の知見であったり、公式のように定まった真実のように見えるものでさえ、より大きな未知の法則の一部に過ぎなかったりするものです。

子どもたちのこれからの学びは、「平年」についての知識を後生大事に暗記しようとするようなものではなく、今やそこから大きく離れて変化していこうとしている世の中の現実をしっかりと見つめながら、果敢に不思議の解明に挑み、おかしいと思ったことには「おかしい！」と臆せず声を上げられるような力を育むものでなくてはなりません。そのためには、私たち自身がそうした姿勢を持ち続けなくてはならないと思っています。

学校では今、そうした教育に向けた、新しい「学びの地図」となるようなカリキュラムを作ろうと検討を進めています。子どもが将来その手で平和な社会を、幸せな生活を作れるような力を育むため、どうかこれからも本校の教育活動にご理解、ご協力をいただけますよう、よろしくお願いいたします。